

書人翠軒

書人翠軒



書人翠軒

一九六一年九月二十日発行

定価二二〇〇円

編者 伊東参州

本文 精興社
写真 宮本印刷
製本 加藤製本

発行所 株式会社 二玄社
東京都千代田区神田須田町一ノ四
振替 東京六六三番・電話(25)五九六三番

まえがき

明治二十二年一月生れは戸籍上のことで、實際私がお袋の腹から出たのは、二十一年の暮だったとのこと、生れたときは、くらげのようにぐらぐらしていて育ちそうもなかったので、出生届と死亡届を一緒にやろうと父と母とが話合って二三ヶ月延ばして届けたという。

丹羽海鶴、比田井天来の両大先生は長逝され、畏友田代秋鶴、川谷尚亭両君もすでに他界せられ、私は独り生き残りの感がしてならない。すべては夢と過ぎ去ってしまった。同郷の書友伊東参州君、熱と実とを傾けてこの書の編集に当たってくださった。まことに感謝に堪えない。

昭和三十五年十月

翠軒

目次

書談縦横

丹羽海鶴先生……………3

川谷尚亭君……………13

吉右衛門丈……………21

良寛……………29

空海……………37

随想

ほんの一言……………43

芸と魂……………44

五月二十四日……………46

楷書観……………48

文楽を観る……………52

いよいよ辛卯を送る……………54

回顧七十年

古筆を観るの最後	56
芸と人と家庭	62
六十四歳になる	64
私の作品	71
らっこ、あざらし	75
破窓童言	77
思出一つ	80
ふるさと	88
中学生	94
小学校教員	98
出京・研究	104
国定手本執筆	121
戦災・疎開	127
終戦以後	131
芸術院賞受賞	133
賜餐の栄に浴して	134

芸術院会員に就任

141

春日麗

金田心象

145

書翰

149

年譜

185

人を語る

永遠の若さ

天野四郎

195

翠軒先生

田中松亭

199

古稀翠軒に感ありて

宮川翠両

203

君忘れめや

絹田岐陽

207

翠軒先生と万葉集

藤本実

209

偶感

国井誠海

211

翠軒芸術

大塚毅夫

214

個展に寄せて

松尾英敏

216

父を語る

鈴木勝太郎

219

同郷の大先達

伊東参州

229

翠軒ひとりよがりの書説

239

書
談
縱
橫

丹羽海鶴先生

先生は寡言^かなたちで、したがって高朗ではなかったが細情の人であった。生きていた天神様だといわれたほど気品のある方であった。私の兄弟子である田代秋鶴君とは月に一回は必ず招待されて夕食を御馳走になった。私にはいつもアツカンの特級酒を出してくださった。田代君もあまり飲まなかったし、先生も体に気をつけて盃に三四杯ぐらいであった。そのときの話はたいがい当時の書道界の噂で、裏面の話もずいぶん聞かされたものである。

大正十年ごろだと思うが、上野の山を中心に平和博覧会が開催されたことがある。そのとき私も出品した。松本芳翠君が一等で私が三等であった。そのとき、丹羽先生も審査員だったので、賞品としての扇面の揮毫を四十本ほどお引受けになった。そのとき私と田代君に扇面を書いてみるように言われて、私は五本、田代君は十本か十五本の白扇を渡された。それはちょうど私が蘇孝慈墓誌銘を終って鄭文公下碑を習っているところで、まだ学書の道に入って二三年も

経たないころであった。書ではかけ出しの青二才であったし、扇面など書いた経験はないのでウマク書ける道理はない。いろいろ苦心してみたけれども、先生にお目にかけるようなものができるはずがない。まじめな字を書いたところでウマク書けないのはきまっている。そこで、威勢よく天来風に書くことにした。師匠の海鶴先生に師事してから二年ばかりのときだから、あのように鍛錬された気品の高い書は、どうしても真似られない。そこへ行くと天来先生の書風は、莊子にある「垂天之雲の如き」書であるから、比較的真似がしやすかった。まあともかくも天来風で書き上げた。扇面が書けたら、一緒に夕飯でも食べようとお話であったので、夕方先生のお宅へ参上した。すでに田代君は先に来ていて、ニコニコしている。会心の作ができたに違いないと思った。「鈴木君できましたか。」との先生の御言葉である。

私はビクビクして頭をかきながら、持参の扇面を差し出した。先生は静かにこの中の一本を開かれると、見る見るうちに顔色が変わってきた。御機嫌はなはだ斜めである。これは困ったなと恐れ入っていると「鈴木君、こういうものは四十になっても五十になっても書ける。今からこんなものを書いてはいけません。比田井君はいろいろなものを習って、今日のように書けるようになったのです。それを真似てはいけません。」と、先生は凜然として私を訓戒された。

天にも地にも、丹羽先生にひどく叱られたのは、このときだけである。私はひたすら恐縮して、言葉もなく冷汗三斗の思いであった。

先生の門を出ると、田代君は「もう一度書いてこいよ。」といってくれたので、書きなおすことにした。失敗した扇面の裏を見ると「はい原製」とあった。違ったものではないけないので、さっそく家内を「はい原」までやって、同じ白扇を買ってこさせた。私は家内に白扇が一本七十五銭だったと聞いて驚いた。五本で四円近くにもなる。お恥しい話だが、そのころの私は薄給生活を送っていたので、この四円近くのお金は実に大金であった。しばらく、三人の子供にもお八つがやれないことになってしまった。さて、五本の扇面に再び書いた。下手は下手なりに、真面目に書いた。もちろん、自分でも気には入らなかったが、それでも先生の所へ持って行くと、まあ、これでよろしいと収めて下さった。馴れない扇面書きは、苦い^{にが}経験であった。

このこと以来、私は翻然として真面目な書道にかえり、真正書道に、真一字に邁進するようになった。

もしそのとき調子よく褒められでもしていたら、私は有頂天になって邪道に突き進んだに違いない。現在流行の前衛の親玉になっていたであろう。実に有難い教訓であった。奇筆を弄するとか、奇態を喜ぶような学書の態度は、いわ

ゆる筆端の末技である。真の妙書は、筆到り意到って自然に流露するものでなくてはならない。雅致ある床柱、数寄をこらした違棚は奥床しいが、ただそれだけで家が成りたつものではない。やはり家の骨組はまず真直ぐな良材をもつてがっしりと組み立てねばならぬ。学書も同じことである。

毎日曜日の午前中に、お清書を持って先生のお宅へ伺ったのであるが、そのお清書は殆んど添削加朱してはくださらなかった。細書きの朱筆でマズイ所をちよいと指されるだけであった。それ故どこが悪いかは自分で考えなければならなかった。たまたま添削することがあってもホンの一画か二画であった。正規に書く所など絶対に見せてはくださらなかった。鄭文公下碑を習っていたころ、あるとき、「先生《子》の字がどうしても書けません。ちょっと書いてみてくださいませんか。」と懇願した。「そうか。」と行って例の朱の細筆で速目に書いて見せてくださった。私は目を皿のようにして、その運筆と用筆とを凝視した。先生は実に易々楽々と書かれた。そのときの印象は、いまだに眼底に残っている。このとき、用筆法というものを悟った。そのとき先生は、さらに「波法は百発百中やれるが、縦画は、そうはゆかない。とても自信がない。」といわれたが、やっぱり縦画はむずかしいものである。

また、あるとき、鳴鶴先生が書かれて先生にくださったという上下二冊の鄭

文公下碑を見せてくださった。私はそれを拝借して双鉤文字にしようと思ったので、さっそく「それを貸してください。」とお願いした。先生はあまり快よいようではなかったが、ともかく貸してくださった。そのときも先生は鄭道昭を鳴鶴先生から七年かかって習ったと述懐された。私は家へ帰って、ドーサ引きの残紙に双鉤で写して、次の日曜日に原本をお返しすると同時に双鉤文字をお見せしたが、先生は私の写本文字を見るとすぐ、双鉤にするときには原本の文字の外側からとってはいけない、文字の境界線の上から直接とるものである。と教えてくださった。

先生は腕も確かであったが、それよりも目の利く方であった。かつて井原雲涯氏が晩翠軒から三十五冊本の余清斎帖を発行したことがある。一部三十七円であったと思う。私もそのときそれを買おうと思ってそのことをお話すると、先生は「集帖というものは全部がよいものではない、あの余清斎の中でも蘭亭その他一、二点しかいいものはない、その他は皆駄目だよ。」と断定された。

丹羽先生の条幅は今日、硬すぎるとの評があるが、扇面は実にじょうずであった。扇面よりも手紙、手紙よりも細楷が得意であった。和とじの罫紙へ細楷で書かれた知人門人関係の人名簿が三冊位あったが、あれは実にうまかった。驚くほどである。良寛も細楷が第一であるが、良寛の細楷と並び称せられても

よいくらいな緊った品のよいものであった。王羲之系統であるからだ。今は何処にあるだろうか。

いつであつたか、私が御邪魔したとき、「鈴木君、僕今から鳴鶴先生の所へ行くが、君も一緒に行かないか。」との御言葉であつた。私は今まで一度も参上したことがなかったから、ぜひといつてお伴をした。そのとき先生は、どこかの展覧会へ出品される中雅仙聯落ち大の作品を持参された。作品の下見をしてもらうために行かれたのである。鳴鶴先生のお宅へ参上した丹羽先生は、鳴鶴先生と対座されるや、いとも丁寧に何べんも頭を下げられた。

そのとき鳴鶴先生は八十余歳、丹羽先生は六十歳であつた。鳴鶴先生は棒立ちになつて立つておられる。その前に御自分の作品を拵げて平身低頭、教えを乞う厳肅な姿を見て驚かされた。六十歳ともなり、大家といわれるような人はややもすると不遜の態度があり勝ちだが、そのような所は微塵も見られない。丹羽先生の御立派な態度に打たれて、それ以来先生に対する尊敬の念を深めたことを覚えてゐる。

先生は李嶠詩を徹底的に練習されたことがあつたというが、そのことを絶対漏らされなかつた。私も好きで、あけ暮れ習つていた。そのころ、七・八人の門人が先生のお宅に集まつた。李嶠詩の話が出ると、先生はかつて書苑に出た

のを法帖仕立てにせられた一本を出して来られて、「これですね。」といわれただけであった。

ちょうどそのころ、先生はたいへん多忙であったので、お宅で下見をしていただくのも失礼だと思って、私は、李嶠詩を倣書した展覧会出品の一幅をお勤め先の高等師範まで持参した。お昼の放課時間であった。大きなテーブルの向うに立っておられた先生の前に表装した作品をスーッと払げると、一字か二字出るか出ないうちに、「やったな」と先生がいわれた。私はあのような先生のお声を聞いたことがない。「李嶠詩をやったな」という意味であることはいうまでもない。それでもそのとき先生は李嶠詩を研究されたことを一言もいわれなかった。それからさらに先生は、「鈴木君、君が李嶠詩風で書いたところで、これがわかる者は比田井君と松田南溟君ぐらいの者で、他にはちょっとないぜ。」ともいわれた。それ以後、展覧会の出品中に、李嶠詩の臨書があると、「鈴木君、こりゃ君の領分だ、審査は君に頼むぞ。」と、全く私の専門のようにならかわれたものであった。また、先生は欧陽詢の書を猛烈にやっておられたことがあるが、それも一切口外されなかった。

鳴鶴先生が大久保公神道碑を揮毫されたとき、その跋文を門人の近藤雪竹、丹羽海鶴、比田井天来の三先生に書かせたことがある。そのうち丹羽先生の書

かれたのが採用されたのである。その書は行書風であって、実に風韻の豊かなものである。田代君の話によると、先生が李嶠詩を研究猛習されていた直後の作であるとのことである。今、印刷されたその跋文を拝見するにつけても、その書の絶妙に感嘆せざるを得ない。当時の先生の得意や察するにあまりある。

私が九成宮醴泉銘や皇甫君碑が楷書では一番よいと思っていたころ、それを全臨して持って行ったことがある。「これはいけない。」といわれただけで、どこが悪いのか指摘されない。「鈴木君、欧陽詢をやると行き詰るぞ。」とそれだけいわれた。この話は先生が孟法師碑を熱心に研究されているところである。

先生は半生の大半をこの碑の臨書に打ち込まれたほどの熱愛ぶりであった。当時、私は孟法師碑などはよいと思わなかったので、先生のこの言葉といい、何故熱心に孟法師碑を研究されているのか不審に思われてならなかった。先生御在世中、私はその好まれる理由を拝聴し得なかった。先生の御病氣が篤く、絶望を伝えられるころから、私は全くこの碑が一番好きになってしまった、四十二歳ごろからである。妙諦如何と御懷抱の御達見を伺うの日もなく、ついに先生は逝かれたのである。愚かなる身の致す所とはいえ、長恨やるよしもない。長年猛習してはじめて先生の達見、達識がわかったのである。

菴翁晩年の傑作といわれる松井遊見叟碑稿は世に二冊ある。鳴鶴先生の所に